

〔満濟准后日記〕永享七年二月廿八日。今日灸治不可。有子細之由申聞、ヤウカウ灸治了。

〔拾芥抄下末〕忌五體不具穢事○中略

〔中略〕

灸治穢者七日居灸之人三日但膿血出間不可參神社

是師說也

〔徒然草〕灸治あまた所になりぬれば、神事にけがれありといふ事、ちかく人のいひ出せるなり、格式等にも見えずとぞ。

〔燕石雜志〕字體俗字解附○中略

榎巷談苑に、灸一灼を一壯といふは、壯年の人にて、幾灼と定めたれば、壯とはいへり、としょりたるもの、いとけなきものは、ほどくにつけて其數を減するなり、沈存中が筆談に見えたりといへり、愚按するに、この説非ならん、壯は艾と同音なり、正字通に、艾、舊註音壯、火貌熏蒸也、今炊粉羹謂之艾糕、一説、陸田曰、醫用艾灸一灼謂之壯、俗因作艾、艾糕説非と見え、亦方書に、往々、灸幾艾に作るを見て、その義、壯年の壯を象るにあらざるを考るべし、壯艾ともに熏蒸の義ならん歟、もし壯年の灸治に幾壯と唱ふるものならば、老人には幾艾といふべし、艾は老也、老人に幾艾といはざるをもて、灸一壯の壯は、壯年に當ていふにあらざる事を察すべきにや、亦按に、素問に、壯火少火の辨あり、老かれども灸灼の義にはあらず、

〔梅園日記〕二、灸幾壯

松蔭醫談云、灸一壯二壯といふは、壯人をもて準とする詞なりと、古人の注し侍るは、いかなる事ぞや、予是を考ふれば、壯壯字形の似たるより、いつしか寫し誤るのみ、按するに、通俗編數目云、後漢書注引華陀別傳、有灸此各七壯語、三餘贊筆醫家用艾、一灼謂之一壯、沈存中言、以壯人爲法、其云若千壯、壯人當依此數、老幼羸弱量力減之、按此説未是、周禮考工記東氏云、○中略、讀此則知、灼艾所云壯者、亦候烟氣節耳、○中と見えたり、此説新奇なりといへども、是なりとも定がたし、沈存中の説は、